東京中日スポーツ新聞 2016年11月25日

◆ご希望の方にはこの写真を販売します。フォトサービス03・6910・2557（平日午前10時～午後5時）。

〈略歴〉1954年松山市生まれ。中央大卒。82年、中日新聞社に入社。主に東京本社写真部で事件やスポーツ、自然などを取材。「富士異彩」と「渡良瀬有情」取材班で新聞協会賞を受賞。東中写真デスクを5年間務めた。趣味は野鳥観察。東京新聞に写真企画「探鳥」（毎週木曜付）を連載して20年に。著書は「再生の原風景」（東京新聞出版部）など。

絶景へ行く

車は東関東自動車道佐倉インターチェンジから国道51号経由で約10分。無料駐車場約300台。電車はJR佐倉駅南口と京成佐倉駅南口から無料送迎バスあり。平日は1時間に1本ほど、土日祝日は30分に1本ほど。庭園の入園料は大学生以上200円（美術館入館料）。美術館入館料は展示内容で変わり、一般は1000円から。開館時間は午前9時半から午後5時。原則月曜、年末年始は休館。

問い合わせ DIC川村記念美術館 ☎0120(498)130

1990年にオープンした美術館は、DIC（旧社名・大日本インキ化学工業）が収集した作品を公開している。広大で緑豊かな庭園は、里山の地形を生かして造成。池は調整池の機能を持たせて、新しく造られた。

コブハクチョウ6羽と一緒に、この日確認できたオシドリは60数羽。オレンジ、紫、黄、白など、雄の姿はあでやかだ。水辺の青い宝石と呼ばれるカワセミも数回現れ、彩りを添える。

撮影を終え、美術館を見学してみる。江戸時代の画家・尾形光琳（こうりん）が描いた「柳に水鳥図屏風（びょうぶ）」に、6羽のオシドリの姿があった。日本人に長く愛されてきた水鳥なのだとあらためて実感する。この作品の展示は27日まで。

オシドリは北海道や東北などで繁殖し、冬は関東や西日本で越冬するカモの仲間。全長は雄45㌢、雌41㌢。常に連れ立っている仲良し夫婦をおしどり夫婦と呼ぶが、実はオシドリは毎年つがい相手を変え、抱卵するのは雌だけという。

いつも寄り添うように泳ぐので、仲良く見えるのだろう。越冬地でつがいになり、春に繁殖地に旅立つ。美術館の池は毎年1月はカップルでにぎわい、100羽を超える。恋の季節に、また会いに来よう。（堀内洋助）

Active★Life　アクティブ★ライフ

ツール・ド・フランス名物

悪魔おじさん

いきなり羽田で奇声！あわや入国できず

ずっとこの格好で過ごしたゾ～

ジャンプ力はさすがで、滞在ホテルまで全力疾走で帰っていく

昨年のツール・ド・フランスの悪魔おじさん＝AFP・時事

㊧ツール・ド・フランスさいたまの会場に出没した悪魔おじさん㊨と、悪魔娘のレイナ㊨と永田祥子㊧（山口和幸撮影、他の写真はいずれもクリーン工房提供）㊦羽田空港にて。このヤリ、どうやって飛行機に持ち込んだんだろう？

悪魔娘と緊急ユニット

今回は大会協賛企業である建物総合管理会社の「クリーン工房」が悪魔おじさんを招待した。同社は昨年、女性タレントを起用した「悪魔娘」を結成して大会の盛り上げ役となったが、今年はホンモノの悪魔おじさんの招聘（しょうへい）を実現させ、悪魔娘2人と緊急ユニットを結成することに。

「ディディが会場に現れた際には大パニック。来日したトップ選手と並んで黄色い声援を浴びていました。64歳でありながら強靭（きょうじん）な足腰で会場をさっそうと移動するし、自転車に乗って選手に交じってレースに参戦してしまうし」と悪魔娘のレイナ。

「まさに神出鬼没。顔見世走行ではコースをブーツで全力疾走。私たちも表彰式まで登壇することになり感無量。汗なのか涙なのか涙腺が崩壊していました」と悪魔娘の永田祥子。

羽田空港の到着ロビー。背負っているナップザックしか荷物を持っていない

荷物は赤いナップザックしかない。そのため羽田空港の入国時に入国管理官や警備員もびっくりしたようで、強制送還の寸前だったようだ。到着ロビーでも奇声をあげ、日本に足を踏み入れたとたんに悪魔のパフォーマンス全開。結局、着替えはまったくなく来日中は常にこの格好だった。

ナップザックだけ

実はドイツの自宅を出たときからこの服のまま。手ぶらで、大会前後の滞在時には多くの目撃情報が寄せられた。滞在先となった朝食無料のビジネスホテルでは朝食会場に1人でいる姿が目撃された。休憩を兼ねたお昼時もファンに見つかるとサインや写真撮影に応じた。ベジタリアンでアルコールは一切口にしないとの証言も。本人は日本でこれだけ人気があることに感激の面持ちで、すでに翌年の来日を楽しみにしている。

自転車で行こう

Let's go by bicycle

ツール・ド・フランスの沿道で悪魔にふんして応援し続ける名物人間、悪魔おじさん（エル・ディアブロ）ことドイツのディディ・センフトさん（64）がツール・ド・フランスさいたまの開催に併せて初来日した。着替えを1枚も持たずの一張羅。到着した空港で奇声を発しておわや入国できずの大騒動。日本でも大暴れだった。（ベン＝山口和幸）

初来日狂騒曲

64歳、跳んではねて…実はドイツ人

悪魔おじさんは毎年ツール・ド・フランスの沿道で、赤い悪魔の衣装に身を包んで全日程を応援する。手には悪魔の小道具であるヤリを携え、選手や関係者を待ち構えるのである。国籍はドイツ。職業は「自転車デザイナー」だともらった名刺には印刷されていた。毎年趣向を凝らした「変わり種自転車」を制作して沿道に持ち込んでくる。聞くところによれば、何台かはギネスブックに掲載され、ベルリン近郊にはミュージアムもあるという。

翌年新妻の姿なし

悪魔おじさんはたいていゴールから20・3㌔ほど手前に陣取っている。「このあたりのほうが沿道も窮屈じゃなく、しっかりと応援できるからだ」という。レース終了後に翌日のコースまで移動して、買い込んだ食材を自炊して簡素な夕食を済ませ、クルマの中で睡眠を取る。

ある年は「結婚したんだ」と、赤い小悪魔の格好をした女性とともに仲よく応援していた。ところが翌年はその姿が見あたらなくて、うわさによれば愛想を尽かされて別れてしまったとか。

自転車ロードレースでは残り地点1㌔に赤い逆三角形の小旗を掲げるのがルールだが、「ドイツでは赤い悪魔の意味なんだ。だから自らをそれになぞらえて赤い衣装を着用しているのだ」と説明。もう20年近くツール・ド・フランスの沿道にいるのに、英語もフランス語も話せない。来日時にボランティアとして帯同したドイツ人留学生が通訳してくれたコメントだ。

アクティブ★ライフ　Active★Life

★応募要項★　はがきに「なんでも検定」の回数、5問の答えの番号、希望するA～Cの賞品名、〒住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記

◆2017年ガラス製の干支の置物「酉（とり）」を3人に　C. 3人

皇居や国会議事堂などに硝子作品を納

★プレ

◆戦国無双～（コーエーゲームス、P424円）をNHK大丸もクライ

◆「大関純L瓶語」を厳選され用し、伝統今に伝える術により醸の旨みとコ酒。きらび輝きが彩り

なんでも検定

開運の書

第353回

★ルール　以下の質問で、それぞれ3つの選択肢があります。正解を選び番号で答えて